強辱
後編
Adult only

強辱
獣達の狂宴
そして女達の散華
後編

テキスト　蛙雷

表紙・挿絵　月工仮面

テキスト朗読　如月さくら

中室亜華音

強辱

獣達の狂宴

そして女達の敵華

目次

目次

強辱　〜　獣達の狂宴〜　そして女達の惨華……

生贄六人目　川村美智恵……7

生贄七人目　如月美緒……25

生贄八人目　樋口恵美子……77

獣達の狂宴　続き……95

テキスト朗読

生贄六人目　川村美智恵　……　如月さくら

生贄七人目　如月美緒　……　中室亜華音

生贄八人目　樋口恵美子　……　中室亜華音

獣達の狂宴　続き　……　中室亜華音

生贄六人目
川村美知恵

生贄六人目

川村 美智恵　（ 6-1.Kawamura.mitie.1 ）

この場に居る女達は、全員が男達に犯される事を知っており怯えていた。そんな中でも特に怯えていたのは彼女……川村美智恵だったかもしれない、だから怯える女達の中にあって、その怯える姿が一際目を引き、かえって男達の目を引いたのかも知れない……

美人と言うよりは、何処か幼さを感じさせる愛らしい面差し、髪型もまだ学生ぽさを残しており、とても人妻だとは思えない、そしてその愛らしい顔を恐怖に蒼ざめさせながら、小柄な身体を傍から見ても憐れなほどにブルブルと震わせながら下を向き、体をひたすら縮み込ませ、次の獲物を狙い定める男の視線から、その顔と身体を必死に隠そうとしていたが、逆にその姿は男の欲望を刺激する事となった。

ガチガチと歯が鳴るのを止める事ができない、嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 助けて！ 助けて！ 助けて！ 守さん！ 守さん！ 守さん！ 嫌だ！ 怖いの！ 助けて！ 守さん！

守さん……彼と初めて出会ったのは、学園の入学式の時……園長先生が祝辞を述べている最中に響き渡った。バァーン！ と言う講堂のドアを開け広げる大きな音、入学式の緊張にカチンカチンとなっていた私は、思わず音がした方を反射的に見る。そして私の眼に映ったのは、くたびれた背広を着た男の人が、汗だくになって立っている姿……ふと、そんな男の人と視線があってしまう。

「くっ……くくくっ……あははぁぁ――！」

まじまじと何故か見詰め合ってしまった私と男の人、なんだかその男の人の姿が妙に面白くて、私は大きな声で笑い出してしまう。やがて、その笑いは周囲に伝染して行き、緊張と厳粛に包まれていた講堂の中は、笑い声に満ちあふれた。

それが私と守さんとの初めての出会いであり、その男の人がクラスの担任だと知ったのは、ホームルームの時だった……そして、それが切っ掛けとなって私と守さんとの御付き合いが始まる。

最初は、生徒と先生と言う単純で普通の間柄、それが

何時の間に互いを意識しあうようになり、何時しか二人の仲は学園の中で噂になって行く……そして二人は、学園の園長先生の下へと呼び出される。

紆余曲折……二人の交際を認めて貰うために引き起こされる事となった。学園中を巻き込むような大騒ぎの末に……

★　其の壱～『学園卒業後まで、教師と生徒の間柄の一線を越えない事……』

★　其の弐～『卒業後は速やかに結婚式を正式に挙げ、入籍する事……』

★　其の参～『結婚までは、清い交際までとする事……』

（ちなみに学校にばれた時点では、まだキスまでしか二人は交わしたことが無かったりする）

以上の事を条件に、二人の交際は学園公認の下に認められる事となった。

そして無事に結婚式を挙げたのは一週間前、園長先生学との約束を守る為に、キスまでで我慢し続けていた守さん……

（これは私の方も我慢していた様な気もする）

ようやくに結婚式を終えて、いざ！　新婚初夜を迎えようとした時に、守さんは友人達に強引に連れ去られ、私は予約したホテルの一室で、守さんの帰りを一人寂しく待つ事となる……そして守さんが帰ってきたのは夜明け間近の事で、グデングデンに酔っ払った守さんは、私をベッドへとした押し倒した次の瞬間に、大きな鼾をかいて眠り込んでしまった。

そして新婚二日目、新婚旅行先のホテルでの夜、今夜こそ二人は結ばれると緊張していた私だったが、余りに緊張しすぎたせいなのか、それとも結婚式の疲れが出てしまったのか、ホテルの部屋に着くなり急な発熱でダウンした私……そんな私の姿を心配そうに見た守さんは、私を求める事無く、熱でうなされ続ける私を、何処かに出かける事もなく3日間看病してくれた。

そんな新婚旅行から、新居のマンションへと帰宅した夜、今夜こそ守さんとの初めての……そう思って緊張していた私だったけど、今度は守さんの方が熱を出して寝込む事となる。そして今度は、私が三日間の間看病した。

そんなこんなのドタバタとしたこの一週間、それでも今日の朝には、守さんの熱も下がり、食欲も出てきた。

そして守さんは、今夜は大丈夫だよと私に言う……何が大丈夫なのかは、言うまでもない事だ。その言葉を聞いて頬を染める私を見た守さんは、今すぐでも大丈夫だよと言ってくれたけど、流石にすぐに守さんの腕の中に飛び込む事は、恥ずかし過ぎて出来なかった。

私は、今夜の為に栄養のある物を食べさせてあげるからと、少しだけ笑って、その場を御誤魔化しながら、慌ただしく買物へと出かけて、色んな物を買い込んだ。
どうして私は、あの時に守さんの腕の中に飛び込んで行かなかったのだろう……守さんの腕の中に飛び込んで、守さんと愛し合う事が出来ていたなら、この様な恐ろしい目にあう事無く、幸せな時間を過ごす事が出来ていあたのに！
だからお願い守さん、私を助けて！　怖いの……本当に怖いの！

二巡目、そして二番目に犯す女を選んでいた男……一巡目の時に、秋山　小百合を犯した男が、その怯え続けている川村美智恵に目を止めて、その前の足を止める。
移動する足音を、閉じた眼の暗闇と恐怖の中で聞き続けていた美智恵は、自分の前で止まる足音に体を強張らせ、その場から逃れようとするように、その体を同様に怯える女達の中に隠そうとしたが、逆にその体は他の女達から弾き出される。
「あうっ！」
女達の中から弾き出され、ベチャリと床に這い蹲る格好となる美智恵に男の手が伸びる。

「ひっ、いやっ、いやぁぁ――！　守さん、たすけてぇぇ――！」
恐怖と絶望に見開かれ美智恵の目に映し出された男の手、その伸びてくる手から逃れようとするかのように美智恵は、助けを求める悲鳴をあげながら、両足と後ろ手に縛られた姿のまま、這いずる様にして、縛られている女達の群れの中に逃げ込もうとしたが、そんな姿勢で逃げられる筈もない、すぐ男の伸ばされた手が、美智恵の髪を掴み、そのままカウンターの影へと引きずって行く
「いやぁ、助けてぇ、守さん！　たすけてぇ、おねがい、まもるさぁぁ――ん！　いやぁぁ――！！」
ジタバタと無駄な足掻きをしながら引きずられていく美智恵、必死に夫である男性の名前を悲鳴混じりに叫ぶが、名前を呼ばれた夫が助けに現れる事は無く、カウンターの影へと引きずり込まれて行った。
カウンターの影へと美智恵を連れ込んだ男は、怯え続ける美智恵に腰から抜き取ったナイフを見せながら、何か脅かすような事を言うが、美智恵は男の姿は無論、声も満足に聞いてはいなかった。
「いやいやいや！　助けてください、助けてください、初めては守さんと決めていたんです。今夜、ようやくに守さんと一つになれるんです。ずっと待っていたん

です。だからお願いしますから、勘弁してください、お願いですから何もしないでください、助けてください」

男の言葉を聞く事も無く、またその意味を理解する事も無く、ただひたすらに懇願と哀願を繰り返しながら泣叫び続ける美智恵、その憐れとしか言いようの無い姿に対して男は、呆れつつも何かを思い出した表情を浮かべると、泣き叫び続ける美智恵の頭を強引に掴むと、自分の方へと向けさせた上で、何事かを吐き出すように言った。

【オレノナマエモマモルダヨ……】

「そんな、違います！　私の守さんは、あっ！　いやぁぁ――！」

美智恵を犯そうとしている男は、自分の名前もマモルであると美智恵に告げる。

男の言葉が本当で、本当にマモルと言う名前なのか、それとも単なるこの場での思いつきの出まかせなのか、それは不明であったが、男の言葉に美智恵は、当然のように否定の言葉を吐き出す。

その吐き出された言葉を、美味い酒でも飲み干すかの様な笑みを浮かべながら、男は縛られている美智恵の服へと、手に持っていたナイフを潜り込ませ、上から下へと一気に切裂いた。

「いやぁぁー！　やめてぇ、お願いだから、やめてぇぇ！」

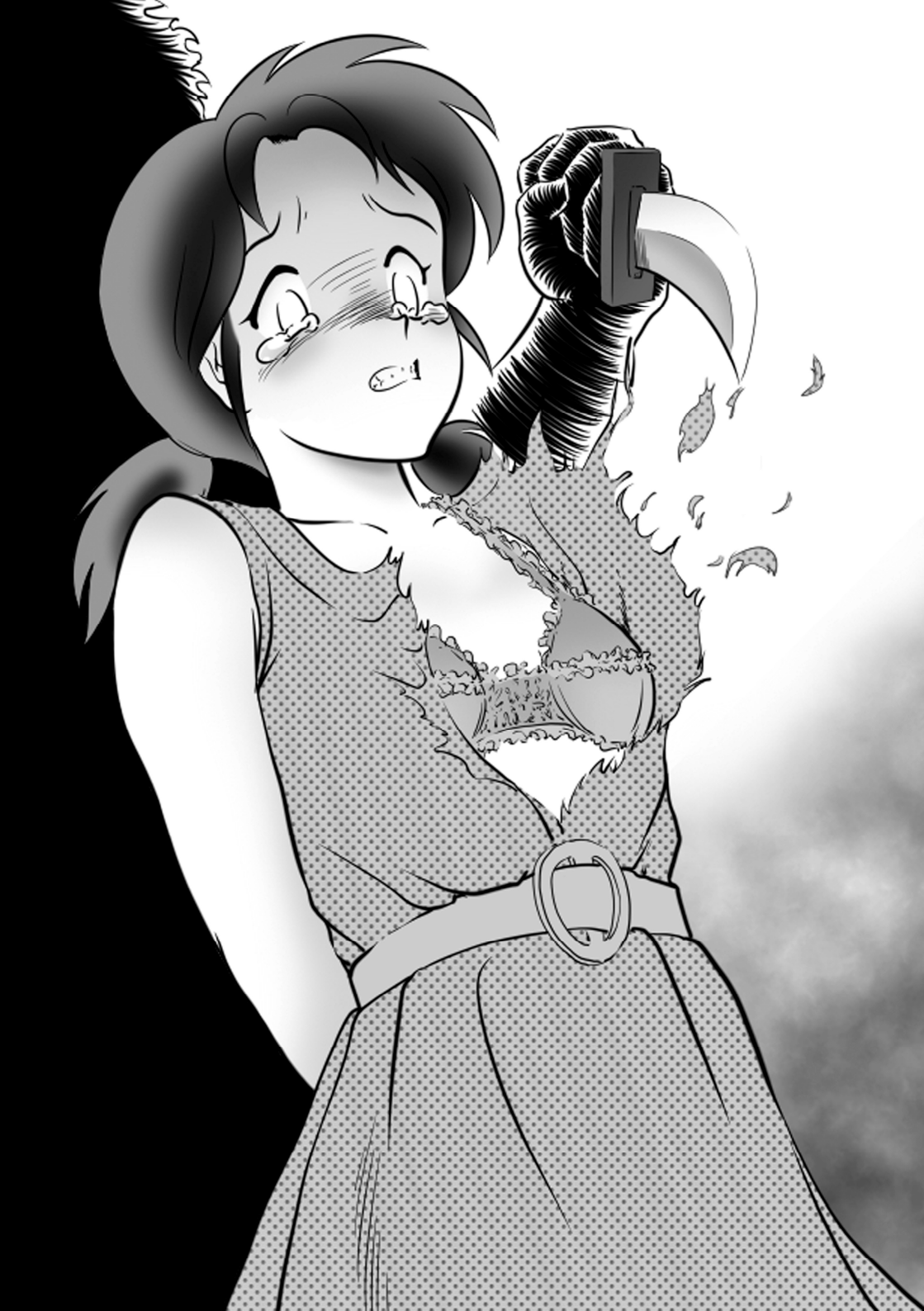
切裂かれ布切れと化して行く白い服の残骸と、その下から現れる小さな花が刺繍にされたフリルで飾られたピンク色のブラジャー、そのカップとカップを繋ぐストラップの間にナイフが差し込まれる。

「うぐぅ、やだぁ……やめてください、お願いします……まもるさん、たすけて……まもるさん……」

差し込まれたナイフの冷たい感触が乳房に触れ、絶望にも似た恐怖を溢れ出させて行く、わざと乳房にナイフを押し当てながら、その柔らかな感触を冷たいナイフの越しに男は感じ取る……ナイフの峰の部分、平たいブレードの部分、エッジの無い切れない箇所を器用に使いながら、男は乳房をナイフで嬲り、美智恵に恐怖の声を上げさせ続けた。

「くひぃ……あぁぁぁ、ひぁやてぇ……誰か、まもるさん……たすけてぇぇ……」

そしてブツンッ！　とナイフはストラップを切断した。

「ひぃ！」

左右のカップが乳房から外れ、その下に隠されていた小さめの乳房が、いまだ陥没気味の乳首と共に男目に曝される。